



湖 色



舟橋聖二
講談社

湖色

昭和四三年六月三〇日 第一刷発行

著 者 舟橋聖一

発行者 野間省一

発行所

株式会社講談社／東京都文京区音羽二―一二―二一
電話東京（九四二）一一一一（大代表）／振替東京三九三〇

印刷所

豊国印刷株式会社

製本所

大製株式会社

定 価

六二〇円



落丁本、乱丁本は、おとりかえいたします。

白 い 逆 浪	素 雪	雨 声	湖 色	夜 匂 う	春 眠	迷 路	後 朝	目 次
------------------	--------	--------	--------	-------------	--------	--------	--------	--------

343	295	247	199	151	103	53	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	---

装帧
||
原
弘

湖 色

後朝きね ぎね

……あたしの名は、鹿子と書いて、かの子と、読ませる。

一

昼すぎ、ノックの音に、鹿子は目をさました。枕許の目ざまし時計が、九時半頃鳴った筈なのに、眠り呆ほうけていたのだろう。

もつともこれは毎度のことと、ぐっすり眠った朝は、少々ベルの音では役に立たない。昨夜寝たのが、二時だったから、正味十時間の満ち足りた睡眠である。

ノックしている相手は、大体わかつている。鶯うぐいす館かんの部屋の一つにいる大村とね子で、鹿子とは同じ商売だが、働く店が違う。

「寝坊だね——まだ、寝ているの」

「目はさめてるんだけど……待ってね、顔だけ洗うから」

これは嘘である。

「いいよ、顔なんか洗わなくっても……早く明けて」

と、せき立てるうち、ノップを廻すと、キイを掛け忘れたと見えて、ズルズルとあいてしまう。

「あら、ま——ぶ用心な。戸締りしないで寝るの」

「じゃア忘れたんだわ……酔っていたかな」

「のがれぬ証拠よ。夜中に泥棒に襲われたらどうするのよ」

とね子はいって来て、客用スリッパを突っかけ、

「カーテン、あげたげる」

と云って、部屋を明るくしてくれたが、そとは曇っているのか、まぶしいほどではない。

鹿子はまだ寝たままである。

「もう、お昼すぎよ。何時まで寝るつもり。お眼々が流れ出しちゃうわよ。あんまり起き出さないと、心配しちゃう。数枝さんかずえみたいなことがあるからね」

数枝のことと云うのは、去年、鶯館ではじめてあったガス自殺の未遂である。

横着をきめこんで、鹿子が起きずにいると、とね子はスカートを股の間へはさむようにして、布団の中へ、足から入れてくる。女の寝ている布団へ、男が入ってくるのとも違えば、男の寝ている布団へ、女が寄添って寝るのとも違う。どっちかと云えば、子供の寝て

いるところへ、若い母親が乳をくれに、添寝にくるときのような感覚だ。とね子は鹿子より、二つほど年上である。

「おお、温かい」

足が足に触れる途端^{とた}に、とね子が云った。

「そっちは温かでも、こっちは冷たいわよ」

「今朝は氷が張ったわ」

「道理で……もつと、くつつけてもいいわ」

「ほんと……まだ氷が張ってるうちに買い物して来ちゃうと、履^いもんがよごれなくつていいよ。うす氷がピシリピシリって割れる音、うち、大好きや」

「何を買いに行ったの」

「揚げに焼豆腐。甘辛に煮て食べたの。うまかったわ」

「そんなこと聞くと、急にひもじゅうなつて、お腹の虫が鳴き出すわ」

「どら——」

「イヤ——」

お腹のへんをさぐられては、くすぐりたい。

「鹿子はどうして、ネグリジェ着ないの」

「バジャマのほうが好きよ。思いきり、股をひらいてもいいし……ネグリジェだって、かまわないけど、サマにならないわ」

「ひとり者は、パジャマのほうがいいかも知れないね」

「好き好きにまかせるべきよ。とね子はネグリジェでしょう」

「うん」

「彼が好きなんですよ……それを云わせようとして、カマ掛けたのね。好かんわ」

「何云ってるの。十時間も寝たくせに」

「何時間寝ようと、一人で寝てるんだもの、神や仏のご利益なんて、ありゃアしないよ」
「まア、イヤだ。この人ったら、寝足りたくせに、荒れてるわ。ほんとうに、一人なの」
「きまつてるじゃない」

「徳本さんとおるんじゃないの……評判よ」

「何が証拠よ」

「別に、人の色事の証拠固めするほど暇人もないでしょうがね」

「ところが、いるのよ、広い天下にはね……お店のホスにも、そういう暇人がいて、他人のことに目鯨ばかり立てているわ。色男と逢って来た女と、これから逢いにいく女とは、足音までちがうんだって……」

「それ聴きわかるっていうのね」

「そうなの……あたしも、徳本義明を好きだったことはある。でも結局、あの人をつかめないんだわ」

鹿子は低い天井を見たまま、自分に云う独白のように云った。

この六畳間は三階で、西側と北側に窓がある。半分畳で、半分が縁甲張りだが、鹿子はベッドを置かず、畳の上にマットレスを敷いて、縁甲の上には、革のスツウールが置いてある。北の窓は九尺二枚の硝子戸で、張出し風になっているから、日はささないが、明るい部屋である。その窓をひらいて、張出しのラワン板の上に腰をかけると、低い崖の下の窪地に、一ぱいに立ち並ぶ街景色が、一ト眼に見わたされる。

三階建アパートと云っても、鶯館は鉄筋ではない。普通の木造建築では、三階建はゆるされないのに、はじめは客室用でなく、物置とか押入とかの名義で届け、許可を取ってから改造したのだろう。鹿子は背丈が低いからいいが、この頃の娘のように、背が高い上に、髪を大きくセットすると、天井にぶつかりはしないかと思うほど、天井が低いのも、二階建で許可をとって置いて、三階に直したせいに違いない。

二年程前に、鹿子^{かのこ}が引越して来た当時は、その窪地に、ところどころ、空地^{あきち}が残っていたのに、いつのまにか家屋が建ち並んで、今ではどこもかもギッシリである。が、眼を遮切る高層建築はないので、西北側の空に、はるか新宿へのネオンライトが望まれる。

電車道路をへだてた向うの谷間に、色街がある。昔、繁昌した時代もあるそうだが、今はさびれて、芸者の数も、芸者屋の数も、ほんの僅かなものになってしまったと云う。

鹿子はこの部屋で、一日の四分の三を暮して、夕方の五時半から十一時半までの六時間を、銀座の酒場イヤリングで働く。もともと一日の四分の三と云っても、風呂場のないア

パートだから、近所の桃の湯へ行かねばならぬし、毎日美容院シニールで、髪を結う時間も、バカにはならない。お店のホステスは、なるべくこの部屋へ呼ばないことにしているが、大村とね子のように同じアパートの中のつきあいもあるし、シニールで馴染になった女友達が遊びにくるのまで、入れないというわけにもいかない。それより、一人でする炊事に飽きて、ぶらっと外へ食べに行くこともあれば、店のお客にさそわれて、ご馳走になることが多いから、実際には留守がちで、三日も四日も、ご飯を炊かずじまいでいることは少くない。

——男同士の交友は、^{つきあい}まかり間違えると、地獄の底まで連れて行かれるそうだが、女同士の友情も、実際には限りがない、しかも色の上手な女は、みんなと毎日ガヤガヤつきあいながら、誰にも勘付かれないように、ちゃんとかくし男をもつ。

「へえ……あの人がやっぱり」

あとでそれを聞かされて、あいた口がふさがらぬ思いをするのも、そんなに珍らしいケースではないだろう。そんな、まるで完全犯罪のような色恋もあるけれど、すぐ臀^{しり}が割れて、みんなにはやし立てられたり、変に同情されたり、かと思うと、真顔で忠告されたりする下手^{へた}なものもある。

鹿子と徳本義明の場合は、あくまで秘密にされたのでもなければ、自分から告白したわけでもない。只、何んとなく、浮名が立ち、その割には、恋の灼熱を味ったわけでもなく、点^ついたり消えたりするけれど、案外にいつまでも持続して、みんなの記憶から、忘れ

去らない——。いや、みんなの噂が消えないのが、鹿子かのこと彼の関係が、今でも尚、煮え切らぬ形で残っている証拠だった。

——とね子に、徳本の名を云われたので、鹿子はもう、いつまでも布団のうちのぬくもりに未練を持ってはいられなかった。

「起きるわよ」

と云いざま、上半身を起し、同時に掛布団をまくると、股の間へはさんだ筈のとね子のスカートが、膝の上までまくれていて、威勢のいい桃色の素足が二本、鹿子の目を刺した。

「どうしたの。急に起きて——」

「美容院の時間がとつてあるの」

こんどはとね子が寝たまま、

「この頃、不景気だから、夕方までに行けば大丈夫よ」

「それより一杯、ビールが飲みたい」

「食べたくないの」

「飲みたいの」

「悪い子だね。さっきはひもじいって云ったくせに」

「焼豆腐がうまそうだったからよ……寝起きのビール一杯は、こたえられないわ。でもよす……ビールなんか飲まないで、美容体操でもしましょう。とね子も起きて」

「よし」

鹿子はバジャマの上着をぬぎ、二つの胸の豊かな実のりを露わにして、

「一二……三四……一二……三四」

とやり出した。

美容院シユールから戻ると、電話呼出しのランプがついていた。留守中にかかる電話は、この点灯でわかるようになっていた。

徳本からだな、と思った。このところ三度ばかり、こっちから徳本のアパートへ掛けているのに、音沙汰がなかったのは、管理人の取次が悪いと云うより、電話器の設備がなっていないからだ。鹿子は出かける衣裳に着換える前に、受話器を取上げた。

「どこから掛ったんでしよう。いつもの声ですか」

管理人は四十がらみだが、額がぬけ上っているせいで、齢よりは老けて見えた。

「いや、……重原泰雄とかって方でしたよ」

すぐには、名前と顔がダブらなかったが、少し考えると思い出された。去年、二ヵ月ほど、時々店へ来た客で、来ればかならず、

「鹿ちゃんを呼んで——」

鹿子がそばへ行くと、急に酒がうまくなるように、水ワリをお代りした。そのうちに、一緒に写真を撮りたいと云い出した。

この頃そんなことを云う客は少いので、

「どうして、写真なんか撮るの」

と反問すると、

「ぼくには、やかまし屋の兄があつて、それがある婦人と結婚しろとすすめるのだ。ぼくはその婦人がきらいなので、鹿ちゃんと仲よくしている写真を送ってやれば、その婦人も、あきらめるだろうとおもう」

と答える。鹿子はちよつと思案してから、

「それは偽証罪になりますね」

「偽証罪か。なるほどね。ぼくは面白いことを考えたつもりだったが、鹿ちゃんはそれを上回る面白いことを云うね。然し、そんなこと云わないで、人助けと思つて、一枚撮つて下さいよ」

「それより、そのご婦人のどこがそんなにおきらいなの」

「一度、男と同棲したことがあるのに、嘘をついているんだ」

「今に、ちゃんと告白なさるわ」

「それから、自分ほどの美人はないと思つている……それがぼくには、鼻もちならない」

「そんな美人が、重原さんに結婚申し込むなんて、すてきじゃない」

「兄夫婦が強引に縁談の成立をもくろんでいるので、当人は進んでいる筈がないんだ」

「進んでいる、いないは、わからないじゃないの。そうなって見なければ」

「そうなってからじゃア、引ッこみがつかないものね。ぼくには、鹿ちゃんのほうが、はるかに美人だが、あなたは自分で美人でございって、鼻の先に札をさげてはいない。そういう美人が、ほんとの美人だ」

重原は、ひどくおだてた。一緒に写真を撮りたい一心からだろう。が、ほめられて悪い気をする筈はないから、鹿子は自分をほめてくれた重原に、商売気はなれて、テーブルへほかのホステスを呼んでやらなかった。自分の番の客でも、はじめから終いまで傍にひっついていないで、さり気なく席を外すと、お茶をひいている子が、代りに行き、ブランドエ・コークの一ぱいも飲めば、それだけ勘定が増え、商売になるわけである。呼ぶ呼ばぬが、ホステス同士はバロメーターで、その子はその客に、どの位熱いかという惚れ具合を測ることができるのである。

然し、とうとう最後まで、重原と並んだところを、カメラにおさめることは、同意しなかった。ホステスにとって、客は大事な玉だが、同時に、可^こ恐^{おそ}い敵でもある。うっかりその手に乗ると、酒場の経理に穴をあけるばかりでなく、それこそ、地獄まで連れて行かれることもある……。

その当座、ずい分熱心に通ったのに、二ヶ月もすると、ピタリといたちの道切りになった。鹿子は何やら憑^つきものがおちたように吻^{くち}ッとしたものの、多少の淋しさもないことはなかった。

(やっぱり曰くがあったのだ)